

プロセスに重点をおいた造形表現の意味 ～表現本来のあり方を目指して～

The Meaning of Modeling Expression Placing Important to the Process With particular reference to what the expression should be

椎名 澄子
Sumiko SHIINA

旭川大学短期大学部幼児教育学科

Abstract

This report describes the attempts of educational practices based on the methodology of the “Modeling Expression” in Kindergarten teacher training education. Also, the deference of “Manufacture” and “work” is indicated in this paper and several case studies that use the characteristics of “Expression”, that is, “Imitative activity”, “Initiative activity”, and “Creative activity” are showed. This paper concludes with suggestions about this topic.

1. はじめに～問題と目的～

筆者が教員養成課程の専任教員となって丸4年が過ぎようとしている。この4年間、いつも筆者を悩ませてきたことが1つある。それは「表現」することの意味に関してである。指導しているなかで、新入生が「美術は抵抗感がある」「美術は苦手」と口にするのを度々聞いてきた。これは今までの学校教育の中で受けてきた美術指導が児童生徒にとって、こと「表現」することに関して意味をなしてきていないのではないか、と言える。また、今年度幼稚園教諭免許更新講習講師をする機会を与えられ、その際に質問用紙へ記入する際に簡単なアンケートにも答えて頂いた。そのアンケートでは、造形活動を実施するに際し、保育者は何を重視し、どのような問題を抱えているのか、造形活動にどのような意識を持っているのかなどについて聞いてみた。その解答からは、やり直し（描き直しや作り直し）や必要以上に設定を設けて「製作させる」など、自己の表現を無視した活動が実際に行われている現実が浮き彫りとなってきた（巻末の参考資料「保育者の解答例」を参照のこ

と）。ここで本論文では「製作」と「制作」を以下のように定義していきたい。①製作：「実用的な物品などをつくること。作業としてのもの作り」、②制作：「絵画や造形などの作品作り。創造性のあるもの作り」。幼児教育の造形指導にあたって驚いたことの一つとして、子ども達の作品作りを「製作」と表していることであった。美術の世界では作品作りは「制作」を使うのが当然のことであって、創造性のあるもの作りの中で、子ども達の作品を「製作」と捉えていることは、造形活動が作業としてのもの作りであることを表していること以外の何物でもない。言うまでもなく現行の幼稚園教育要領における「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」ことがねらいとして定められており、内容においても「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、作ったりする」ことは求められている。しかしながら、実際の保育現場では、表現の過程よりも結果重視の「評価主義」、そして技術の習得や器用さを測る手段になっている様子もうかがえる。

そもそも、完成作品の結果重視やねらいありきの受動的活動の問題点は、子どもひとり一人の表現を通して、思いや考え方、テンポなどを無視して進めることにあると筆者は考える。子どもの遊び全般を通して言えることだが、時間をかけて1つのことにじっくり取り組むことでそれぞれの「こだわり」が見え、その「こだわり」は試行錯誤の継続につながる。そのことこそが主体的な子どもの成長発達へとつながっていく。

先に述べたように、ものづくりに「苦手意識」を持つ保育者が子どもの造形活動を行うことの悪循環はゴール（作品の完成形）を決め、そこを目指すだけの活動になり、プロセスの重要性やそこにある楽しさに気付くことができないことにある。作品の完成度は、工程数で決まるのではなく、それに費やす「時間」とそこから生まれる作品への思いの深さ（愛情）で決まる。手順通りに進む活動に、果たして創造性があると言えるのか、ゴール（決められた作品の完成形）に向かって一斉に進む活動に、こだわりの「時間」はあるのか、もし、その活動の導入に想像力を掻き立てられるきっかけがあったとしても、その創造力を注ぎ込むだけの自由な時間は保育時間の中には存在しないのではないか。そんな心配も出てくる。

今回のアンケートからは保育者が造形表現活動の目的を十分に理解するための知識（基礎・理論）がないため活動に自信がなく、教本を頼りに「作品の完成」を目指すことで正解を求めているようにも捉えられる。表現活動は、愛情（思いやり、興味、関心）とユーモア（ワクワク感）で構成されている。筆者は「表現」の世界では、わがままでいい、自由でいい、こだわりをやり通していい、と考える。なぜなら「表現すること」は、人間の根源であり、その行為は時に生きる活力となり自己の存在意義を再確認することができ、自己肯定感を高める効果があると考えるからだ。

そこで本論文では、将来保育者になる学生たちに造形表現活動の指導の中で、「表現」することの意味を意識した指導のあり方を検討してみ

たい。

2. 「造形」での「表現」を意識した取り組み

今回事例として取り上げるのは、一般的に幼稚園や保育園で行われる「模倣的活動」「能動的活動」、そして「創造的活動」の3点としたい。その理由としては、「作品を作る＝表現する」という当たり前の解釈が、現在の子どもたちを取り巻く環境では全くの別のモノとして捉えられているように感じるからである。そこでは、作業を行い技術を習得する、いわゆる「お勉強」となってしまった「作品作り」と、身体や五感を使った形（造形）に残らない「遊び」としての「表現する」という行為が区別されている。どちらも作品制作であり、表現することであるということをこの3点を例に具体的に示していきたい。

1) 「模倣的活動」の事例

まず「模倣的活動」については、一般論として条件が多くあり、狭い枠組み（素材・大きさ・形・色などの決定）の中で、確実にある一定のクオリティーをもつ作品ができる利点はある。しかしながら、目標が「作品の完成」や「出来栄え」「技術の習得」になる危険性を伴う。作品がその後の遊びにつながると、その活動は「道具の製作」となり、そこに使いやすさなどを求める創意工夫や試行錯誤が行われるかもしれない。作品の完成が活動の終了となる場合は、展示等の工夫をしたうえで「鑑賞」の活動にも十分に時間をとることが望ましい。このことは幼稚園教育要領の中でも強調されていることではあるが、なかなか他児の表現に触れられる時間を十分に配慮しているとはいいがたい。そこで今回はゴッコ遊びや環境を体感することへつながる造形活動の取り組みを2つ取り上げる。

プロセスに重点をおいた造形表現の意味
～表現本来のあり方を目指して～

①『なんちゃってパフェ』



<内容>

対象：年少、年中、年長（年齢によって工程を省略）

所要時間：60分

準備物：カラー粘土、クリアカップ、紙粘土、
絞り金具、絞り袋、竹串、絵具、スポンジ、コック棒、タイを着用

*あえて「作り方」の指導を行い、活動そのものを「ごっこ遊び」とする

<ねらい>

- ・素材の多様性を知る
- ・虚構の世界で創意工夫をしながら作る

②『風になる』



<内容>

対象：年長（組み立てに複雑な工程あり）

所要時間：60分

準備物：スチレントレイ、ストロー（太、細）、
画用紙、紙コップ、カラーペン、アルミホイール

科学工作の1つ

<ねらい>

- ・風を体感する
- ・風を受ける仕組みを知る

よくありがちな模倣的な活動（トイレットペーパーの芯で雛人形をつくるなど）を創造的な活動にするには、造形の要素（形体・素材・色）のうち、どれか1つに自由に表現できる選択の幅をもたせることが必要となる。例えば、日常使用するもの（トイレットペーパーの芯、紙コップ、紙皿）をそのままの形状で活用する場合、それらが別の価値観へ発展することへの発見をねらいとし、そこに付ける素材（装飾等にかかる材料や画材）や色のどちらかを自由に表現できるように設定するなどの工夫が大切となる。活動の中の選択肢が少ない場合、「上手にできている」ことに着目し、色使いや構成のオリジナリティに幅をもたせることが難しくなる。

表現活動の際忘れてはならないことは、肯定的な自己イメージを与え得るものという点だ。「表現」は、人との関係性の中で豊かにしていくことが重要で、五領域で言えば特に「環境」「人間関係」と関連を意識することが求められる。保育者（指導者）の役割は子ども（学生）の「表現」を引き出すこと、そして表現を引き出し、尊重し、共感し、その楽しさを共有することである。また、道具や材料などを含む環境を周到に準備し、学生たち（子どもたち）が〇〇と出会う場を演出することが表現行為の強い動機となる。保育者（指導者）が共に表現に加わり、劇的空間を作り上げる盛り上げ方が肝要と言える。

その意味において、導入の成功が造形表現活動に大きく影響するとも言える。「ワクワク」「ドキドキ」など想像力を掻き立てられる導入では、保育者（指導者）自身が子ども（学生）たちよりも先にその世界観に入っていく。当然のように、保育者（指導者）も十分に楽しむことになる。保育者が苦手意識を持ったまま楽しまずに「表現活動」に入ることのまずさがここにある。作品そのものよりも、それに費やす時間とそこで生まれた「表現」を大切にする。保育

者（指導者）自身も表現を発信し、表現（造形活動）そのものをコミュニケーションのツールとすることを忘れてはならない。

2) 「能動的活動」の事例

能動的活動の特徴としては、①多様な価値観の発見がある、②ライブ感がある、③偶然から生まれる（新たな展開へと発展する）、④何度やっても同じものにならない、という4つがあげられる。参加者の意見や反応によって常に変化していく「能動的活動」は、保育者自身も「表現者」の一員となり作品を協同で創り上げていくことができる。このことは、模倣的活動のような完成形が提示しやすい作品製作とは違い、保育者が作品の「正解」を決めつけてしまう危険を回避できるという利点がある。通常の作品制作を行う活動とは違い、「能動的活動」では色や技術の選択の他、材料・素材として「人」が関わっていく。これにより活動内で各々の役割が生まれ、創意工夫・試行錯誤を繰り返す中で、同じ時間と空間を共有したという一体感も感じることができるだろう。能動的活動において注意すべき点は、子どもたちには「自由な選択幅」が大きいように感じさせ活動を行うことが大切であるが、保育者は大枠での活動の全体像を描くため、活動の場所（空間の大きさ）や材料の数量、活動人数、活動に費やす時間等を通常の造形活動以上に、十分に考慮する必要がある。

『くるりんトンネル』



学生と一緒に造形表現活動を検証し、新たに組立てた活動

<内容>

対象：協同制作（親子、年中、年長）

所要時間：60分

裸足での活動

保育者2人以上で行うのが望ましい

※完全オリジナル課題

※5領域の「人間関係」と「環境」に関連する活動

1. 海をつくる（養生シートに装飾）
2. 波をつくる（わらべうた「大風こい」）
3. 海の中を泳ぐ（「くるりんトン」の掛け声で波を持ち上げる→海の中を走る）
4. 海をまとめて巨大魚マンボウに（片付け）

<ねらい>

- ・協力し合い、一つのものを作り上げ、感動を共有する
- ・風や空気の流れを体感する
- ・ビニールの特性を活かし、浮遊感を体験する

3) 創造的活動の事例

創造的活動の特徴として大きな枠組み（素材の決定、大きさの決定など）の中で、自由に表現できる範囲が広く、個性が出やすいことがあげられる。実際の保育現場での造形活動は、月齢や保育環境により、制作技術や展示空間などの条件に限りがある中で行っている。調和を崩すことなくバランスのとれた展示空間作りや、個々の技術の差を目立たせない作品作りに意識がいくあまり、こどもが自ら素材や色や材料などを選択する余地のない「模倣的活動」を行っている。作品制作において大切な3つの要素である「素材」「色」や「材料」の何れかに自由な表現の幅をもたせることで、自ら創意工夫・試行錯誤を繰り返し、その結果、達成感が得られる。創造的活動では、個々により制作の進捗が異なり、大人（保育者・保護者）の期待する「作品の完成」とは異なる作品が生まれることがある。その場合は無理に大人の描く完成形を求めるのではなく、素材そのものに「余白」を作らない工夫が必要である。（雨粒くん：粘土接着面に色付きのボードを使用する。スタンドグラス：裏面にアルミホイールを貼ることで、着色

プロセスに重点をおいた造形表現の意味
～表現本来のあり方を目指して～

をしなくても「銀色」の色面として見える。)

① 『雨つぶくん』



<内容>

対 象：年少・年中・年長

所要時間：45分

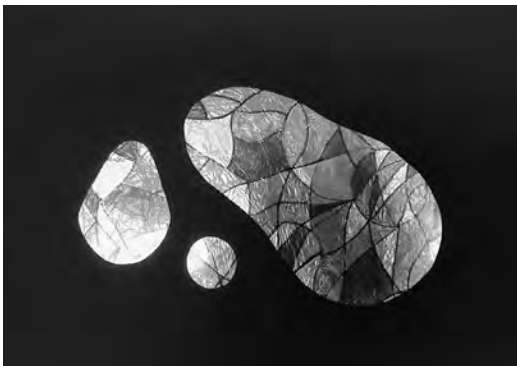
準備物：粘土（カラー粘土による混色）、スチレンボード、シール素材の代替え

同じ型を使用することで「模倣的活動」に見えるが、色数を3色以上入れることで無数のパターンが可能になり、オリジナリティがでる「創造的活動」になる。シールとは違い、粘土は型に合わせて形体を変えることができる。また、月齢に合わせ、粘土の形体を自由することでより創造性のある作品になる。展示方法により、共同制作作品としての表現も可能となる。

<ねらい>

- ・粘土のさわり心地を楽しみながら形をつくる
- ・配色や形態の組み合わせで描き作る楽しさを知る

② 『簡単スタンドグラス』



<内容>

対 象：年少・年中・年長

所要時間：45分

準備物：クリアファイル、油性マジック、黒画用紙、アルミホイル

年少から行える造形活動

黒で線を引き、その間をカラーマジックで塗り込むという単純な内容だが、個性がハッキリとでる創造的活動。外側の黒画用紙を自由に切り取ることで活動の幅が広がる。

<ねらい>

- ・色と光の美しさを知ることができる。
- ・配色や形態の組み合わせで描き作る楽しさを知る

3. 考察

以上、過程に重点をおいた造形活動の事例を3つ見て頂いたが、これらの事例を通して共通して言えることは、表現する自由を子ども（学生）に保障しておくこと、あらかじめ設定したねらい以外の発見を子ども（学生）たちが自ら経験することもあるということだ。よって、指導者には常に柔軟な姿勢（思考、対応）で活動を流動的なものとして捉える力が求められる。保育者（指導者）自身が、子ども（学生）たちの表現から新たな活動の「ねらい」となるものを発見することで、次の新たな表現へとつながっていく。この積み重ねが子どもたちの成長発達へとつながっていく。また、造形活動とは試行錯誤の連続、すなわち失敗や寄り道の時間であり、そうした一見意味もなく見える活動の中にこそ、子どもたちの成長の目があることに保育者は気づかねばならない。

一般的な保育現場での造形の指導として、画用紙の枠に留まらず、その内側に魚や鳥、人間のアウトラインまでもが保育者によって描かれている場合が見られる。最後には、全員一緒に同じような位置に同じ数だけ「目をつけましょう」との指示がある。それらは「導入」の一つのように見えるが、「誰が描いても魚と分かる絵」というゴールに向かっていて、それは創造性を育む造形表現活動とは程遠いものであることに気付く必要がある。絵を描いたり、ものをつくったりという行為は、作品の完成が

目的ではなく、どのような発見がそこにあり、子ども自身が自己の成長とその可能性を実感できる体験の一つであるべきで、その経験から自己肯定感が育まれていく。

子どもの描く絵やつくる作品には、子ども自身の心情が込められていることは誰もが知っていることである。それが大人の思う理想と違ったとき、作品そのものを大きく修正して、心を強引に操るように「健康な心」を無理やり表現しているように感じる。作品は、言葉同様に(ときに、それ以上に)その作者の心を知る手がかりとなり、赤ちゃんの「ウンチ」と同じで、心の健康状態を知る大きな役割も持っている。また、「ウンチ」は体内に溜めておくと体調が悪くなるのと同様に、良くも悪くも様々な感情を外へ出すことで、少なくとも心も健康に近づく。この行為は、心を開放し、心を軽くする。それは、行為そのものは苦しいこともあるが、結果として「気持ちいい」体験となる。

作品の完成を目標とする活動では、出来栄や技術の習得に重点がおかれ、作る過程で欠かせない試行錯誤が子どもたちから奪われている。試行錯誤をした作品には、作者の「愛情」が深く関わり、それは自分の作品への「愛着」になり、そのことから他者の作り出す作品にも作者の気持ちがあることに気付き、それが他者を思う「思いやり」の気持ちとなる。

「身につけさせる」「気付かせる」「楽しませる」ではなく、「身につく」「気付く」「楽しむ」ことは、自分だけのこだわりをもち、試行錯誤を継続していく「時間」によって得られるものである。その導入として、保育者が子どもたちに画材を与える、空間を与える、言葉を与える、などのきっかけづくりが必要となる。ほとんどの造形活動においては、ねらいにある「達成感」は、「時間内に完成すること」にあるように感じる。作品を時間内に完成したとしても、そこに「達成感」があるとは限らない。自らの行為によって生じた困難に向かい、試行錯誤した結果から得たものに対して初めて達成感は生まれるのだと思う。「失敗し、どうしたらよいか考え、また挑戦し、そうして完成したときの喜びは、そ

の子の心の中にいつまでも確固とした力づけとなって残っていくものになるでしょう。」(安野・佐藤)とのように、達成感とは、作品の完成から得られるものではなく、プロセスの中で試行錯誤を十分にやり切った、という感覚から得られるものである。

「子どもの美術」で示すことは、小学生に向けたことだけではない。幼児やそこに関わる保育者にも大変重要な気付きがある。「こころをこめてつくっていくあいだ…」、いわゆる、心を込めるには十分な時間が必要である。

最後に園内における「作品展示」について論じたい。幼児教育施設を訪れると、キャプション(タイトル等の作品説明)にキャラクターが付いていたり、色などの主張が激しかったり、作品以外の主張が施されていることがある。主役はあくまでも作品であり、キャプションは観る人にその世界観へ誘導するのが役割であることを忘れてはならない。

面白い展覧会の例として子どもの作品展でキャプションが一切無いものがある。作者名も無く、作品に関するヒントが全く付いていない。それを観た保護者は、1点1点子どもと鑑賞しながら我が子の作品を探していく。日ごろ、どのようなことを考えているのか、何にこだわりを持っているのか、上手下手の作品製作の技術の良し悪しではなく、作品を作った子どもの「心」を読み解く時間となる。これが「鑑賞」であり、心を作品で伝えるのが「表現」であると筆者は考える。子どもの作品は、見るものではなく「聴くもの」と知り、もっと子どもたちの心に耳を傾けることが肝要である。

4. おわりに～今後の課題として～

学生との4年間に及ぶ活動や実習訪問や免許更新講習等において現場の声を聞いてみて、学生には伝えてもどうしても響かないことがあり、実際に現場に立って、初めて直面する問題が多くある(時間、完成作品への周囲の期待など)。保育者は、表現活動においてハプニングを恐れず、ハプニングを楽しむだけの余裕(造形の基礎知識と理論)が必要である。基礎知識・

プロセスに重点をおいた造形表現の意味
～表現本来のあり方を目指して～

理論を身につけることで、造形活動を組み立て行うことが怖くなる。

「表現」とは何か。美大等ではあまりに当たり前すぎて正面から考えることもなかったが、教員養成校の教員として、「表現」することの意味をどう学生たちに伝え、そしてその学生たちが保育者となった際に、子どもたちに表現することの意味を遊びを通して伝えることができるのか、を考え続ける4年間であった。

様々な具体的な活動案を知ったところで、表現の根本的な意味合いが理解できていなければ、必ずまた「ネタ切れ」になり、作品の完成ありきの模倣的活動に頼ることになるだろう。短大での2年間で学ぶ基礎知識と理論に加え、さらには実際に子どもたちと造形表現活動を行いながら、保育者間で定期的に「表現」に関する分野の研究および研修等が必要だと考える。その際は、保育者の「表現」への不安を取り除き、間違った固定概念（こうしなければならないという「お勉強」となった表現活動）を取り払い、柔軟な思考で、保育者自身が十分に楽しめる活動を目指していくことが望ましいのではないか。

最後に筆者が常日頃造形表現を教えていく上で忘れずにいる佐藤忠良の言葉で本論文を終えていきたい。

「ずがこうさくの じかんは、じょうずに えをかいたり じょうずに ものをつくったりすることが めあてではありません。きみの めで みたことや、きみの あたまでかんがえたことを、きみのでで かいたり つくったり しささい。こころを こめて つくって いくあいだに しぜんが どんなに すばらしいか、どんなひとになるのが たいせつか、ということがわかってくるでしょう。これが めあてです。」

こうした意識を持つ保育者を一人でも多く育てることが筆者に課せられた使命と考え、今後も造形表現の教育に取り組んでいきたい。

謝辞

今回の論文を作成するにあたり、同僚の佐藤

貴虎先生には論文の書き方等を含め懇切丁寧な指導を受けた。ここに感謝の意を記したい。

参考文献

青木善治「考える力、表現する力、かかわり合う力を育て、自己肯定感を育む図画工作：低学年の子どもの造形活動における相互行為の論理に基づく臨床的教育実践研究」美術教育学：美術科教育学会誌(31)

安野光雅・佐藤忠良「子どもの美術」復刊ドットコム

磯部錦司「絵に見る子どもの心」椋山女学園大学教育学部紀要2

島田由紀子「造形活動に関する保育者の意識：保育系学生との比較検討」和洋女子大学紀要56
辻泰秀・小林修『幼児造形の研究 保育内容「造形表現」』萌文書林

参考資料

【保育者の解答例】

- ・顔を描く活動で、あらかじめ画用紙に人型（正面向き）のアウトラインを印刷したものに描かせていた。それが全く無意味で創造的な活動ではないことに気が付かなかった。
- ・顔の色は「肌色」と指導していた。それが当たり前だと思っていた。
- ・耳を一つしか描いていない子に「聞こえないの?」と言ってもう一つ耳を描き足させた
- ・顔を塗りつぶしていた子に、描き直しをさせていた。
- ・人を描くときは、正面向きが当たり前だと思っていた。
- ・同居する家族に気を使い、離れて暮らす家族と遊んだ絵を描いた子に描き直しをさせた
- ・色には、光の効果やその時の心情で見え方が変わるというのに気が付かず、「ここにはこの色を塗るように」と指導をしていた。
- ・市販の教本に載っている活動をそのまま行っていた→本当に子どもたちは楽しいのだろうか疑問にもちながら（自分も全く楽しくなかった）
- ・作品を時間内に完成させることで精いっぱい

- ・ だった。完成させなければならないと思っていた。
- ・ プロセスなんて考えもしなかった。スムーズに進むことだけを念頭に、目や口をつければ完成！といった感じで活動準備を行っていたため、準備に時間を要しタクタになっていた。
- ・ 保育者自身も、絵を描いたり、ものを作ったりするのが苦手で、子どもたちとの活動時間も、何事もなく早く過ぎていくことをいつも願っていた。
- ・ 必要以上に声掛けをして、作品完成へと誘導し、個性を無視していた。
- ・ 子どもたちが自由に想像を膨らませる時間を与えていなかった。
- ・ 素材や形態や色など、子どもたちが自由に選択できるものがない状態で、造形活動を行っていた。
- ・ 何かしなければ（手を加えたり、型にはめたり）ならないと思っていた。
- ・ これまでを振り返り、子どもたちから自由な表現を奪い、可哀想なことをしていたと反省した。
- ・ 全てを決まった工程で、完成作品が全員同じであることに安心していた。→どのように活動を組み立てれば子どもたちが自由にのびのびと表現できるのか分からなかった。
- ・ 完成作品の出来を競い合う環境になってしまっている。園全体で意識を変えなければならないと思った。
- ・ 「表現の世界では、わがままでいい。自由でいい。こだわりをやり通していい。」ということに衝撃を受けた。少し肩の荷が下りた。ホッとした。
- ・ 自由に子どもたちが表現している姿を思い浮かべ、ワクワクした。早く子どもたちと一緒に活動したいと思った。
- ・ 子どもの作品は、見るものではなく「聴くもの」と知り、もっと子どもたちの心に耳を傾けようと思った。

【現場保育者の気づき】

- ・ 本当は、何かおかしいと思っていた。
- ・ 「造形表現活動において楽しむことは当たり前」という言葉にハッとした。
- ・ 「作品制作で重要な3つの要素（形態、色彩、材質）」を知り、活動のアレンジ方法を知ることができた。
- ・ 「これは、子どもたちにではなく、今日は先生方に向けて伝えたい」と言って紹介してくれた「こどもの美術」の言葉を聞いて、考えさせられた。
- ・ 個々で行う活動しか考えもしなかった。
- ・ 屋外で行う、音を聞いて行う、集団で行う、そんな活動はしたことがなかった。